天然記念物（ネコギギ）緊急調査

西 村 昭 史・宮 本 敦 史

目　的

三重県内のネコギギはに北勢・中勢地域の河川において個体数が急激に減少し，地域個体群の存続が危ぶまれている状況にある。また，比較的良好な状態で個体群が維持されている宮川水系においても，河川改修や周辺環境の改変等生息環境の悪化による個体数の減少が心配されている。このため，県内のネコギギの生息状況および生息環境の把握と保存対策の立案に資するため本調査を実施する。

方　法

1）生息分布調査

員弁川水系，鈴鹿川水系，雲出川水系，櫛田川水系，五十鈴川水系および宮川水系の12河川，41地点において調査を行った。まず調査対象河川を陸上から視察し，水深，流速，河床等の状況からネコギギが生息可能と思われる地点を選定した。これらの地点で夜間に２人以上で潜水し，水中ライトによる目視観察を行った。ネコギギが発見された場合は魚体の大中小を目視観測し，可能な限り捕獲して体長および体重を測定した。

2）生息環境調査

過去に流況，河床等が調査されている員弁川水系のＡ川および宮川水系のＢ川において，川を横断するように20m間隔で３～４測線を設定し，１m毎に表面流速，水深，底状を測定観察した。

なお流速は横河電機製ポケットタコメーターモデル3631を用いて測定した。

結　果

1）生息分布調査

ネコギギの生息が確認できたのは員弁川水系，雲出川水系，櫛田川水系および宮川水系の６河川であった。宮川水系では生息範囲は限られているもののネコギギの発見は比較的容易にでき，個体群が維持されていると推定された。一方，北勢および中勢の河川では雲出川水系の一部で今期発生したと思われる小型魚がまとまって発見されたものの，櫛田川水系および員弁川水系でそれぞれ１尾発見されたのみで，それ以外の河川では生息が確認できず，個体群の維持が危惧される状況にあった。

ネコギギ以外の確認魚種で，出現頻度が高いのはヨシノボリ属，カワムツ，オイカワ，シマドジョウ，ヒメハヤ属などで，希少魚のアカザも比較的多くの地点で確認できた。

捕獲した全ネコギギの体長ヒストグラムを図１に示す。雌雄の区別が無く，河川別に区分できるほどのデータがないのでおおよそであるが，体長４cm，７～８cm，11～12cmにモードを持つ３群に分けることができそうである。

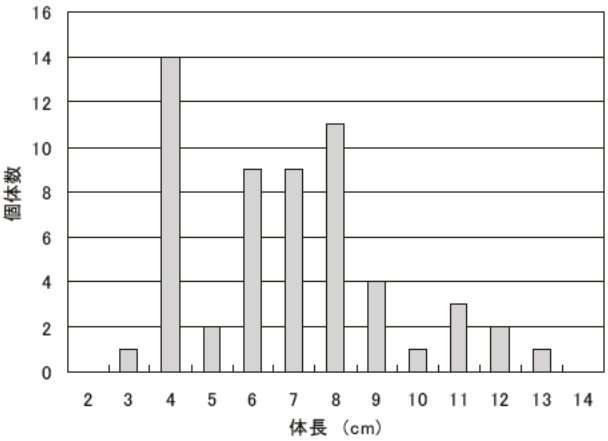

図１　捕獲したネコギギの体長頻度分布

2）生息環境調査

三重県教育委員会・東海淡水生物研究会（1993）と生息環境を比較すると，員弁川水系Ａ川での変化が著しく，水深が全体に浅く40cm以深の場所が無くなり，極端な平瀬になっていた。また，ネコギギが身を寄せる浮き石が存在せず，ネコギギの生息は困難と思われた。

一方，宮川水系のＢ川のＣ地区では1990当時と生息環境に大きな差は見られず，Ｄ地区では右岸にコンクリート護岸がなされたという変化が見られたが，ヤナギが繁茂し，全体的には生息環境が悪化したようには見られなかった。